

私の幼児教育論 XI

神 沢 良 輔

三 保育の基本 (九)

—— 幼児とのかかわり合いの中で ——

(xi) “そそう” したときこそ、幼児とのかかわりをもつチャンスである。

(1)

学生の幼稚園教育実習について、ある教育委員会へお願いにいったとき、その学校教育課長さんから、

「今の若い先生方は、すべて、短大以上の卒業生で幼児教育について、なんらかの専門的な知識を身につけた人ばかりなんですよ。幼児が、“そそう”をしたとき、その幼児を裸にして、ホースでお尻を洗い流したりするんですよ。このようなことが平

気のできるということは、いったいどうなっているんでしょうか」

というような意味の話を聞かされた。

もちろん、このような行為は、すべての若い保育者に必ずしも共通の問題であるとはいえないけれども、私も過去において、いろいろな形でこのようなことは経験したことであり、その都度、園長としての自分の保育者に対する影響力の弱さをなげいたことも多かったし、また、保育者養成の困難性を感じとったことでもあった。

だが、このようなことについては、幼稚園の現場を離れるときに、美しい思い出を残したいという努力が、私の心の中で働いたというわけでもないと思われるのだけれども、どちらかといえば、いやな思い出として忘れ去るようにしていたのではなかったかと、さきほどの課長さんの話を聞きながら反省したりしたので

あった。

そこで、やはりこの問題をここでとりあげることは、それなりの意味があるのではないかと考えるのである。

(2)

いわゆる“そそう”とか“おもらし”の処置は、保育者にとつて、幼児とのかかわりにおいてあまり歓迎されないことの一つではないかと思われるのである。

たしかに、保育中における幼児の“そそう”は、その処置のしかたがどうであろうと、一方においては、そのために保育を中断するということになる。しかも、そのようなときは、案外、保育がうまくいっていて、保育者がいろいろな意味で手をかけてやりたいことの多い時間であったり、保育者が前面に出て指導している学級全体の活動の最中であつたりする場合に多いということも事実であろう。そのため、保育の流れとあいまって保育者にとつては、どのようにすればよいか、きわめて強い決断を要するといふことになる。

しかも、このことが幼児にされると近くにいる幼児たちの中には、その事実に対して、決して同情的ではないものもいて、

「先生、この子の坐っていたとこ、ぬれてるに、おしっこした

に」

「先生、くさいわ」

「先生、○○ちゃん、うんこしたるに」

などと、はやしたてたりすることもある。

このようになれば、どっちにしても保育はできないということになってしまうのであるから、思いきって保育を中断した方がいいということになる場合が多い。そして、前回でものべたように、“保育者のいる場所を幼児にはつきり伝え”て、他の幼児たちに安定感をもたせ、その幼児の処置をするのが、やはり得策だろう。

他方、これを幼児の側からみると、幼児が“そそう”や“おもらし”をするときは、案外に、活動に集中しているときや、学級全体の活動のときなどのように、緊張を伴う活動をしているときが多いということである。そのため、“そそう”をした幼児にとつても、きわめて強い失敗感や挫折感に悩まされるとともに、ときには、これまでの家庭でのいわゆるしつけの影響から罪悪感をもつ幼児すらいる。もちろん、年齢によっては結果としてそれくささなどが手伝ったりして、きわめて不安定な状態となるだろう。

そのため、幼児たちはいろいろな反応を示す。ある幼児は顔が

青ざめて放心状態のようになって、そのまま啞然として立ちすくんでいたりするだろうし、また、ある幼児は恥ずかしさが前面に出てしゃがみこんだりするというように、幼児によって、いろいろであろうが、しかし、このような幼児たちは、保育者に対して、きわめて強い援助を要求しているということも事実であろう。

(3)

だから、保育者は、まずこのような幼児の感情を受容してやる必要があるろう。

「がまんしてたのね。気持が悪かったでしょう。先生が今すぐとりかえてあげるわね」などと、幼児にやさしく語りかけてやることのできる保育者はすばらしいと思うのである。でも幼児の中には、失敗したということで泣きじゃくったり、反抗的な態度に出ることもある。もし、保育者のいうことばが、口さきばかりで、誠意が幼児に感じられないような場合はなおさらである。

いうまでもなく、平素の保育の中での保育者と幼児との信頼関係も、このような場面では、とくに大きく影響している。だから、口先ばかりでは幼児は動かないし、もし、そのようであれば、保育者は平素の幼児との関係について反省すべきである。

とくに、保育者が、このような幼児の感情を無視して、

「あなた、また失敗したのね」

「したくなったら、先生にいわなくてはだめよ」

「こんど失敗したら先生しらないから」

などと、「そそう」に対して否定的な感情や言動をみせたりすることがあれば、それが幼児にとって、きわめて強い危機的な場面であるだけに、幼児との信頼関係や人間関係にも、大きな影響を与えることはいうまでもないし、このような保育者の行動は論外である。

しかし、保育者との人間関係がうまくいっていれば、保育者の暖かいことばや態度、保育者の目をみて安心した幼児は、やがて、保育者のさしのべる手にすがって、その場から動き始めてくれるだろう。

さて、幼児が「そそう」をした場から動き始めてくれれば、前述のように、他の幼児に行き先きをはっきりして、幼児と手をつないだり、肩に手をやったりして、幼児との身体的接触を保ちながら、処置できる場所へ誘導すべきである。

この間にも、幼児の情緒が安定するように、「すぐに着替えしてあげるからね」などと話しかけてあげることもよいことであろう。

(4)

着替えは、残って待っている幼児のことも気がかりではあるうが、それは、やはり担任の保育者がしてあげることが必要である。このような場面での幼児との接触や世話は、その幼児にきわめて強い親近感や信頼感をもたせるといふことになる。

つまり、「そそう」をする幼児にはどちらかといえば、一般的には、園での安定感があまりなかったり、保育者との信頼関係のうまくいかなかった幼児に多いからである。だから、幼児と一対一の親切的な世話は、その幼児との人間関係を深める、きわめてたいせつな機会といふことになる。

そのためには、幼児の衣服をしまつするとき、いかにもきたないものに触れるかのように、指先でもったり、何かにつつんでもったりするということも、幼児に不安定感や不信感を与えるといふことになることはいうまでもない。

いずれにしても、このようなことが原因で、その後の園の生活において、幼児が元気に生き生きとしてきたといふことも、きわめて多くあることだし、また、「そそう」といふことそのものもなくなつたといふことも多いのである。

さらに、幼児に、

「先生がきれいに洗ってあげるからね」

といつて、時間があればその場で、また、時間がなければ、洗える状態にして、

「もう、大丈夫、先生といっしょにお部屋へ帰りましょう」

などといつて、幼児の情緒をさらに安定させてやるべきである。幼児の中には、保育室へ帰るとき、ひとりではどうも気おくれのする幼児もいるのである。

そして、衣服の乾きしだい、幼児に丁寧にたたんで美しいものを返してあげるといふこともたいせつであらう。

いずれにしても、「そそう」といふことは、保育者にとつて、決して楽しいことではないだろう。でも、そうだからこそ、それに対する保育者の反応は幼児に大きな影響を及ぼすということになる。

このようにときにこそ、幼児とともに生活している保育者の真髓がみられるのではないかと思うのである。

(暁学園短期大学)

